総説

三輪東朔の著述とその伝記

友部 和弘

北里大学東洋医学総合研究所, 東京, 〒108-8642 港区白金5-9-1

The Biography and Books of MIWA Tosaku

Kazuhiro TOMOBE

Kitasato University Oriental Medicine Research Center, 5-9-1 Shirokane, Minato-ku, Tokyo 108-8642, Japan

Abstract

MIWA Tosaku was a practitioner of “shiraku” medicine during the Edo period. It was considered that “Shiraku bunkenroku” (dictated by Tosaku, transcribed by ITO Daisuke) was the only remaining textbook by him. However, newly found Tosaku’s books such as “Yamatoigo,” “Sehon yamatoigo” and “Miwashi kazohomyoyakushu” revealed his portrait and technique in greater detail. This report includes an introduction and a discussion about these three books, and presents a novel biography of Tosaku. Although it has been noted that he focused only on “shiraku” therapy, these new books show that he often prescribed Japanese original formulae of herbs, performed “shiraku” on both prevention and treatment, and used folk medicine simultaneously.

Key words : MIWA Tosaku, Shiraku bunkenroku, Yamatoigo, Sehon yamatoigo, Miwashikazohomyoyakushu

要旨

三輪東朔は刺絡を専門とする江戸期の医家である。その医術を伝える資料は『刺絡聞見録』（東朔口述、伊藤大助筆記）のみであった。東朔と『刺絡聞見録』に関しては『三輪東朔の伝記考』を報告した。ところが近年、東朔の自著による『薬真途異語』『施本大和医語』『三輪氏家蔵方妙薬集』が出現したことで、医術ならびに人間像がより鮮明なものとなった。そこで新出の3書に解説と考察を加え、そこから得られた新知見と既存の伝記資料をもとに、新たな東朔伝を著した。東朔の医術はこれまで刺絡ばかりが注目されてきたが、新出の書により、和方を信奉し、予防には刺絡が第一、疾病に対しては刺絡を優先するなか民間薬や民間療法も積極的に併用していたという新たな東朔像が明らかとなった。

キーワード : 三輪東朔, 刺絡聞見録, 薬真途異語, 施本大和医語, 三輪氏家蔵方妙薬集

緒言

三輪東朔は日中伝統医学の歴史において唯一、刺絡を専門とする江戸期の医家である。これまでその医術を伝える資料は、弟子の伊藤大助によって著された『刺絡聞見録』¹⁾一書のみであった。その研究には、従来、工藤・安井の論考²⁾と拙稿³⁾がある。

ところが近年、東朔の自著による『薬真途異語』『施本大和医語』（『薬真途異語』の異本）『三輪氏家蔵方妙薬集』が見い出されたことにより、東朔の医方、医術ならびに人間像がより鮮明なものとなった。

そこで、新出の著述と『刺絡聞見録』に解説および考察を加え、それより得られた新知見と既存の資料を統合して、新たな三輪東朔伝を著すことにした。

また、本稿末尾に三輪東朔関連資料一覧表を著録した（表1）。

1. 三輪愿『薬真途異語』⁴⁾

書誌

まず開巻首に「発語惑解」と題する序文が1葉ある。序文冒頭には、従来知られていない東朔の号であろう「学古」の印影模刻がある。序文のはじめに「粵ニ施本ト為ス」とあることから（施本は配り本の意）、東朔が自分の医術や医論を弟子や患者に伝えるために著したものであろう。「発語惑解」とは「初めに疑惑（刺絡に対する誤った既成概念）を解く」の意であり、それを本書の冒頭に記したことから、当時の刺絡に対する背景が窺われる。次に「異翁語述」と題する序文が3葉ある。序文末尾には「文

表1 三輪東朔関連資料一覧表 (年代順)

①	『薬真途異語』(外題:『施本大和医語』)三輪愿著. 文化8年(1811)序刊(大塚敬節旧蔵, 武田科学振興財団杏雨書屋所蔵). 注: 資料②と区別するために本書は内題を②は外題を書名とした.
②	『施本大和医語』三輪試著. ①の異本, 同年序刊(武田科学振興財団杏雨書屋所蔵).
③	『刺絡聞見録』三輪東朔口述, 伊藤大助筆記. 文化14年(1817)刊(温知堂矢数医院所蔵).
④	『三輪氏家蔵方妙薬集』三輪東朔筆, 伊藤大助写. 文化14年(1817)写(大助の玄孫, 伊藤祐俊氏蔵, 長野県北佐久郡望月町在住).
⑤	三輪東朔の肖像画賛(1819年成, 所蔵先不明, 資料⑬に収録され).
⑥	『江戸近世医家人名録』初編. 武井周朔・稲葉潤堂編. 文政2年(1819)序刊.
⑦	『今世医家人名録』白土雙儀編. 文政3年(1820)校正.
⑧	『日本医譜』宇津木昆台著. 成立年不詳(1830頃成), 江戸写本(無窮会神習文庫蔵).
⑨	『奇魂(くしみたま)』佐藤方定(のりさだ)著. 天保2年(1831)刊.
⑩	『続諸家人物志』青柳文蔵編. 天保3年(1832)刊.
⑪	『古今墨蹟鑑定便覧』川喜多真一郎編. 安政2年(1855)刊.
⑫	『三輪叢書』高橋萬次郎ら編. 大神神社社務所, 奈良, 1927年刊.
⑬	『医家先哲肖像集』藤浪剛一編. 刀江書院, 東京, 1936年刊(資料⑤を収録し解説を付す).
⑭	『刺絡聞見録』工藤訓正・安井広迪注釈, 自然社, 東京, 1985年刊.
⑮	『刺絡聞見録』篠原孝市監修, オリエント出版, 東京, 1989年刊.
⑯	『三輪東朔の伝記考』友部和弘・小曾戸洋. 全日本針灸学会雑誌, 2000年刊.

化八辛未孟春(1811年1月)」と成立年が記されている。当年は『刺絡聞見録』刊行の6年前, 東朔64歳で大助はまだ入門していない時期である。最終行には「皇都(京都)隱医 三輪愿撰」とある。この「愿」という名称も本書が初出である。「隱医」とあるのは一般医家からの誹謗中傷が強かったため, 刺絡は目立たぬように行すべきことを示唆したものであろう。次に「薬真途異語」の書題があり本文がはじまる。書題の下には「大神」「匡明」の印影模刻がある。この名称は東朔の肖像画賛⁵⁾にみられることから, 本書が東朔の著述で, 「愿」は東朔の別称であるものと考えられる。

内容

書題の『薬真途異語』とはどういう意味か。本文中には「医薬ハ其民ノ病敵ヲ伐ノ兵(ツハモノ)ニシテ無病ノ人ニ益ナシ。常ニ薬ヲ服スルハイラヌ者カ。只, 此刺絡術ノミ常ニ用テ其益有コトハ挙テ箒ヘカタシ」(5丁表2~5), 「刺絡ノ術ヲ以テ病敵ヲ退除スル第一ノ兵トス。薬ハ又, 病城ヲ落スノ器也。寒温ノ両品ハ水攻火攻ノ如シ。落城病敵伐ツノ後ハ寒温ノ両品無用ナル物カ」(5丁裏5~8), 「今万病ヲ治スルニ薬術共広ク探リ求ルニ及ハス。刺絡ノ一術ニテ治セサルハ稀ナリ」(13丁表3~5)などとあり, 度々薬の濫用を戒め, 特に無病の人に薬

は不要であることを強調している。これより「薬真途異語」とは「薬を主体とする医療は真の道にあらず(刺絡を主体とする医療こそが真の道である)」というような意味を含んだ隠語と解されよう。

出自については「我三輪明神ノ遠裔ニシテ」(6丁表5)とあり, 藤浪の解説⁵⁾に「大神匡明ハ大和国三輪大明神ノ社務, 高宮主水ノ一族…上田佐渡法橋ノ嫡男, 三輪彈ト云フ人ナリ」とあることと合致する。一方, 経歴については『刺絡聞見録』と藤浪の解説にはいずれも「はじめは銚子で医業を行い, その後江戸にて業をなした」とあるが, その移り住んだ時期については明記されていない。これに関しては「余, 東都ニ住シテ医行ヲ為ス事, 十余年」(14丁表8)とある。これより本書の刊行年から逆算すると, およそ1800年頃, 東朔が53歳前後のときとなる。

医方については和方を信奉していたことが度々記されている。例えば「…吾国神代ヨリ伝リタル医療ノ方有リ, 中古イカカシテカ棄レリ…如何ニモシテ神流ヲ再ヒ興サント…」(6丁表3~7), 「…家流ヲ号(なづけ)テ今, 好古大和流ト呼フ」(10丁裏10)などとある。また「学古」(古を学ぶ)という号からも窺えよう。和方家として著名な佐藤方定は東朔の医術を賞賛し直伝を受けたという。これより

東朔は和方家として、一定の評価を得ていたものといえよう（方定については後述する）。一方、東朔は「病ニ利有ルコトハ野夫ノ言タリ共、必ス信用ス。又遍歴中、見聴シテ奇驗有ル方法一二ヲ爰ニ述ル」（11丁表1～3）として民間療法を非常に重視し、その研究のために北総銚子浦、信州善光寺の辺りの丹波嶋、常州の山中（東朔は民間療法の中でも、とりわけ灌水法に興味をしめし、この地で学んだとある）などを遍歴したとある。これらの和方を信奉し民間療法を重視していたことは、『刺絡聞見録』にほとんど記されていない。

『薬真途異語』では「異翁語述」をはじめ、本文中にも異翁の口述が多くみられる。東朔との出会いについては「或時、凡ナラザル老異人、風ト来テ我ガ相ヲ観テ曰、予多クノ人ヲ相スレ共、未タ余カ心ニ協フ人ヲ見ズ。ヒトリ汝カ相ノミ我カ心ニ協エリ。依テ今、我国ノ上古神医ノ伝ヲト懐中ヨリ小巻ヲ出シテ、是コソ諸業ノの書ナリ。今汝ニ授与セン。得ト熟読シテ一切ノコトニ目安トナシテ窮理ヲ為スベシ。必ス徒外エ猥リニ他見他言致スベカラズ。慎ミテ信仰セヨ。余ハ口伝ニ教エント云フ」（6丁表7～裏3）とある。一方、異人に関して『刺絡聞見録』（巻下25丁表3～27丁裏5）に以下の記述がある。奇疾を患った天橋将監（伊予の三嶋大明神の神官、将監は官職名で天皇を護衛する役人）が四方八方手を尽くしたが癒えず、最後に東朔のところへ来て治を請う。東朔には以前より試してみたい方法（東朔は毒の所在を刺せばたとえ禁穴動脈でも恐れることはない）と述べていることから、恐らくは動脈刺絡と考えられる）があった。それに対して将監は「死生ヲ以テ先生ニ託セン…我ニ於テ悔ルコトナシ」と、その方を受け治癒する（その後100人に試してみたが一失なしとも記す）。東朔はこれにより刺絡の術を開眼できたことから将監を刺絡の師と崇め異人と称している。以上のように『刺絡聞見録』では、東朔と異人が医者と患者の関係で示され天橋将監と実名をあげるのに対し、『薬真途異語』では東朔が異翁から直伝を受け仙人的な人物像で描写されている。

『薬真途異語』で注目すべきは中神琴溪に関する記述である。『刺絡聞見録』では大田錦城序と伊藤大助自序で、わずかにその存在を記しているに過ぎない（大助は著名な琴溪のことを多く記せば世間の目は琴溪に向くと考えたのかもしれない）。琴溪の

刺絡については詳細を報告したが^{6)~8)}、東朔と同世代の琴溪は湯液医家でありながら刺絡を重視し、日常の診療にも多く取り入れていたことが知られ、少なからず接点があるものと推した（調査した琴溪の著述には、東朔に関する記述は一切みられなかった）。それが本書の出現により明らかとなった。琴溪については「異翁答テ曰。中神生々堂著述ノ書ハ実事妙意ヲ顕シタル書也。当今ノ医、心ヲ留テ熟読スベシ。彼書ノ真意ヲ知レハ一切諸芸共ニ大キニ益アルコトナリ」（8丁裏4～8）と述べるなど、その他の箇所でも東朔、異翁ともに、琴溪を高く評価し範とすべきことを強調している。東朔が当時（1811年以前）目にすることができる琴溪の著述には『生々堂医譚』1795刊、『生々堂雑記』1798刊、『生々堂治驗』1804刊などがある。だが一方、「中神生々堂ハ医術ニ於テハ粉骨碎身シテ行ハレタル共、刺絡ノ術ニハ少シク足ラサル所有リ。若シ彼人ノ医工ニ刺絡ノ術徹底スル者ナラバ、真ニ古今稀ナル名医ノ部タラン」（9丁表7～10）、「刺絡ノ術治ノミ、見識ハ中神氏ノ皮肉ニ分入り施術ハ予ヲ学ヒテ」（10丁表4～5）などとして、こと刺絡の術においては東朔自身が優位であることを主張している。その他「惜ムベシ、我レイマタ其人ニ一度モ面見セサルヲ遺憾トスル也」（9丁裏10～10丁表1）とも記している。

その他に、琴溪は弟子の育成にあたり「医術難言書何以能伝（医術は言い難し、書は何を以てか能く伝えん）」といい、医術を言葉で伝えることは難しく、ましてや書物から学ぶことは不可能との格言を残している。東朔は特に門人教育において琴溪の教えを多く引用している。例えば「家流ハ口授面命ヲ実学トシテ、文学ヲ好マス」（9丁表6～7）、「中神氏ノイエル如ク筆ニノヘカタク、口授面命ニアラザレハ論難シ」などとある。口授面命とは「長きにわたり直接師に寄り添って直伝にて学ぶ」というような意味であろう。

また、東朔と琴溪はともに刺絡と薬物を併用しているが、東朔は『薬真途異語』に「今万病ヲ治スルニ…刺絡ノ一術ニテ治セサルハ稀ナリ」（13丁表3～5）、また『刺絡聞見録』に「刺絡ニテ十二八九ヲ去リ其一ニヲバ湯薬ヲ以テ補翼トナス」（巻上23丁表3～4）と記す。琴溪は『生々堂医譚』に「…百人ニ九十人ハ自然ト愈ルモノナリ、是ハ平和ノ劑ニ佳ナル者ナリ、沈痾痼疾暴病ノ類ニ至テハ攻撃ニ

図1 『薬真途異語』(右側)と『施本大和医語』(左側)の表紙

図2 『薬真途異語』の序文「発語解惑」(右側)と『施本大和医語』の序文「発語解惑題言」(左側)

非レバ救フ事能ハズ、汗吐下、針灸、刺絡、灌水、其症ニ從テ深く思テ行フヘキナリ」(26丁裏6～10)と記す。すなわち難病に対して東朔は薬を、琴溪は刺絡を併用するという相反した考えのもと刺絡を用いている。

2. 三輪愿『薬真途異語』と三輪試『施本大和医語』⁹⁾の比較検討

書誌

『薬真途異語』と『施本大和医語』は両書とも書高は18.6 cm×書幅12.8 cm、全15丁と同様の小冊子である。『薬真途異語』では題簽が欠損しているため外題が不明であった。『施本大和医語』には「施本大和医語」の題簽が備わっており、おそらくは『薬真途異語』にも同外題が存在したのと考えられる(図1)。また「薬真途異語」という理解しにくい

内題も「大和医語」という外題により「やまといご」と読むべきことが明らかになった。

『薬真途異語』には開卷首冒頭に東朔の号であろう「学古」の印影が模刻され、「発語解惑」と題する序文が1葉ある(図2)。次に「異翁語述」と題する序文が3葉あり、「薬真途異語」と題する本文が11葉ある。一方、『施本大和医語』も開卷首冒頭に「学古」の印影が模刻され同様の構成を成している。また『薬真途異語』と『施本大和医語』の本文「薬真途異語」においては、多少刷の感じは異なるが、無罫で半葉10行、行22字詰で計4687文字が記され、同版本であることが確認できる(図3)。

ところが序文の書式と記述においては、両書でかなり相違している。まず開卷首では『薬真途異語』が「発語解惑」とするのに対し、『施本大和医語』

図3 『薬真途異語』の本文(右側)と『施本大和医語』の本文(左側)

図4 『薬真途異語』の序文「異翁語述」末尾(右側)と『施本大和医語』の序文「異翁語述」末尾(左側)

では「発語解惑題言」と改められている。序文内容および本文の5丁表7～8に「爰ニ其窮理徹識ノ意ヲ挙テ其疑惑ヲ解ム」とあることから「惑解」ではなく「解惑」とすべきことがわかる(図2)。書式は『薬真途異語』が無罫で半葉8行、行13字詰の大字で記され、「発語解惑」は193文字、「異翁語述」は557文字の計750文字からなる。一方『施本大和医語』は本文同様の書式(字体)で記され、「発語解惑題言」は415文字、「異翁語述」は1161文字の計1576文字と、『薬真途異語』より826文字増加している。

内容

両書の序文内容を比較してみると、例えば『薬真

途異語』が「…依テ行住坐臥心ニ不随」とあるのに対して、『施本大和医語』は「…依テ行住坐臥心ニ随ハズ変ジテ諸病トナリ百歳ノ命モ中路ニ絶ス」とあり、『薬真途異語』をもとにかなり多くの記述が追加されている。また『薬真途異語』では「此方法ハ即遼古之神聖窮民孜々汲々之真法也」と記すものを、『施本大和医語』は「今此方法ハ即遼古ノ神聖窮民ヲ救済シ玉フ処ノ真法ナリ」とし、理解しやすい文章に改められている。さらに、『薬真途異語』とは一切関連のない文章が追加され、そこには一部本文の内容と重複している記述もある。以上、序文タイトルおよび内容から、大方『施本大和医語』は

『葉真途異語』をもとに、より詳しく理解しやすい文章に改められているといえよう。

両書で最も注目すべき相違は、序文末尾の記述である。『葉真途異語』には「文化八年辛未孟春（1811年1月）」と成立年が記され、その横に「皇都 隱医 三輪愿撰」とある。一方『施本大和医語』には『葉真途異語』と同一の成立年が記され、横には「皇都産 三輪試撰」とある（図4）。ここで『施本大和医語』は『葉真途異語』を改めたものにもかかわらず、同一の成立年が記されていることや、『施本大和医語』には「隱医」の文字が削除されていることなどには疑問が残る。また『施本大和医語』初出の名称、三輪試については次のことが推測される。藤浪の解説によれば、東朔には嫡男の大神能明があるという。また『江戸近世医家人名録』初編（1819刊）¹⁰⁾では三輪東朔とし、翌年刊行された『近世医家人名録』（1820刊）¹¹⁾では三輪東貞と改められ、「家に瀉血伝法有り」との記述もみられる。以上のことから、試ならびに東貞は東朔自身であるか、後継者の名であるかの二通りが考えられる。もし后者であれば、嫡男の能明であろうか。あるいはこれまでの調査により佐藤方定である可能性もある（方定の可能性に関しては後述する）。

3. 三輪東朔口述、伊藤大助筆記『刺絡聞見録』

書誌

本書は文化14年（1817）刊で、上下2巻2冊で黄色地の表紙を付し、題籤には「刺絡聞見録 乾」「刺絡聞見録 坤」とある。書高は26.8 cm、書幅18.1 cmの四ツ目綴である。上巻の見返上には「文化丁丑春発兌（文化14年、1817）」と刊行年を、右側に「三輪東朔先生説 伊藤大助筆記」と、本書は東朔の口述を大助が筆記したことを記し、中央に「刺絡聞見録」と書題があり、左側に「東都書房 逍遙堂」と発行元を記す。

はじめに大田錦城の「刺絡聞見録序」と題する序文が3葉ある。本序文は有野で半葉8行、行13字詰で大字で記され561文字からなる。序文末尾には成立年「文化丁丑（1817）春二月十三日」、撰者「錦城老人 加賀 大田元貞 才佐撰」、揮毫家の「董斎文進書」と「文進」「董斎」の印影模刻、版木師の「沖鶴年」の名が記されている。董斎は本姓、岩松董十郎、名は文進、字は有本、号は徳門道人、小日向に住した¹²⁾。沖鶴年は鶴年が号、平次郎と称す。

近世後期の字彫り版木師で名家の書や序跋文の模刻などを専らとし生没年は未詳である¹³⁾。次に「刺絡聞見録」と題する伊藤大助の自序が5葉ある。本序は無野で半葉13行、行23字詰で記され2552文字からなる。序文末尾に成立年「文化十四年丁丑孟春（1817年1月）」、撰者「信濃 伊藤大助謹述」と「藤原」「祐慶（すけよし）」の影印模刻がある。次の「凡例」は2葉、無野で半葉13行、行23字詰に一字落として記され986文字からなる。

次に主題の「刺絡聞見録卷上」と「三輪東朔先生説 門人 伊藤大助筆記」とあり本文に入る。本文は大助自序と凡例と同様に半葉13行、行23字詰で記され1葉から25葉までで14648文字からなる。途中9丁表1行目に「治験聞見録」と見出しをつけ治験例や各疾病に対する治療法などを記し、末尾に奥題「刺絡聞見録卷上終」として終わる。卷下は卷上と同様に主題の「刺絡聞見録下」と「三輪東朔先生説 門人 伊藤大助筆記」とあり本文に入り、同じ書式で記され1葉から33葉までで19320文字からなる。卷末に奥題「刺絡聞見録下終」として終わる。

奥付には刊行年「文化十四年丁丑仲春（1817、2月）発兌」、発行場所と発行人「三都書舎 京都堀川仏光寺下ル、植村藤右衛門 大阪心斎橋南久宝寺町、河内屋八兵衛 江戸馬喰町三丁目、若林清兵衛」、版木彫師「彫工 春霞堂市右衛門」などが記されている。

以上、全2巻、合計68葉、38067文字からなる本書には約104種の疾病あるいは病態に対して、30種の治験例と約43種の治療法が収録されている。

内容

出自・経歴について¹⁴⁾、本書には以下の記述がみられる。東朔ははじめに刺絡を荻野元凱に学び、後に銚子にて天橋将監の奇疾を療したことで刺絡術を開眼できたことから、天橋将監を異人と尊崇し彼こそが刺絡の師であるとした。その後、浅草に移り住み業をなす。30歳のころより刺絡を専門とし臨床経験40年を有す。『刺絡聞見録』の成立した1817年には70歳をこえていた。儒者としても医家としても著名な錦城は東朔の刺絡術を賞賛している。門人には伊藤大助、田中安忠、手塚良仙等がいた。本書中には三輪東朔以外の別称（号や字）は一切記されていない。

刺絡術については、「病ノ根源ヲ研究スレバ瘀濁

図5 『三輪氏家蔵方妙薬集』の表紙（右側）と本文末尾（左側）

ノ毒血ヨリ外ナシ。…刺絡ノ目的ハ一身ニ循環スルコトアタワズ留滞シテ害ヲナス毒血ヲトルノ術タリ、或イハ一身ニ循環シ栄養スベキ真血ヲ洪滞セシムル瘀濁ノ毒血ヲ去リ運動活発ノ用ヲナサシムルコトヲ主トス。…毒血ノ所在ヲ語レバ、瘀濁スレバ必ズ凝結ス、凝結スレバ其ノ証ヲ発ス、発スル前ニハ必ズ肩背ニ凝ル、其ノ凝ルモノヲ我ハ主トス、スベテ瘀濁ノ血ハ肩背ニ凝ル者ナリ。…刺絡部位ヲ語レバ瘀濁ノ血ヤ留滞シテ凝結スルモノ肩背及ビ脊骨ヲ挟ミテツクモノ多シ。肩井・膏肓・大椎ノ両房・七・九・十一・十四ノ椎ノ辺ナリ。…刺絡コソハ天下第一義ノ術タリ」¹⁵⁾といった内容が述べられている。要約すれば「病の根源は血液循環を障害する毒血であり、その毒血を排除し循環を改善し生体を正常に活動させることが刺絡の目的であり、肩背に凝る悪血こそが病の根本である」といい具体的に刺絡部位を示している。本書には、その他にも刺絡を修得するための心構え、刺絡を万病に用い第一義とする理由、医者としての心構え、患者に対する心くばりなど、全て臨床上、重要不可欠なことが述べられており、刺絡治療を行う上で必読の書である。

日中伝統医学の歴史上、血液循環を主眼とする医家は他にみられない。「天下第一義」とは刺絡が主で薬物治療が客の意味で『刺絡聞見録』中に度々みられる東朔の切なる主張である。また同書に「スベテ先哲ノスル処ハ刺処ヲ定メ絡血ノ現ルベキモノヲ刺ス。先生（東朔）ハ現ルモノハ素ヨリ論ナク現レ

ザルモノヲ刺シテ奇効ヲ奏シ玉ウコト挙ゲテ数エガタシ…」(巻下33丁裏3～5)とある。これより歴史上、一般的に行われていた刺絡は目に見える静脈を的にしていたのに対し、東朔はそれ以外に現れざるもの（毛細血管）を刺して大きな治療効果をあげていたことがわかる。東朔は刺絡の際に吸瓢(吸角)を常用するが、それは毛細血管からの採血を意味するものであり、東朔以外に吸角の使用が認められないことは静脈刺絡であったことを示唆するものといえる(静脈からの刺絡においては自然に放血するため吸角を必要としない)。以上のごとく、東朔の刺絡術は現代医学的にも非常に理に適った、安全かつ有効な治療法であるものと考えられる。

4. 三輪東朔筆、伊藤大助写『三輪氏家蔵方妙薬集』¹⁶⁾

書誌

本書は文化14年(1817)の写本(以後『妙薬集』と略記)である。『薬真途異語』『施本大和医語』『刺絡聞見録』には、奇方妙薬を収録した書を著し他日刊行する旨を記しているが、本書はそれに該当するものと考えられる。書高は約27 cm、書幅は約18.5 cmで袋綴じ、全46丁からなる写本である。表紙に直に「三輪氏家蔵方 妙薬集 全」の外題がある(図5)。巻末には「文化十四年正月十八日始同晦日終 於武州浅草北馬道三輪東朔先生之宅写之 伊藤大助藤原祐慶」とある(図5)。この刊写年は『刺絡聞見録』の刊行年と同年である。大助は本書を約半

月、『刺絡聞見録』を約半年で書きあげていることから、東朔の医術を世に広めたいというきわめて旺盛な研究熱意を窺い知ることができる。

内容

本書には、「トケヌキノ妙方」「虫菌ノ妙方」「痔疾ノ妙薬」「喘息ノ大妙薬」など、およそ370種におよぶ妙方・妙薬が収録されている。妙方においても大半が薬物療法であり、各疾患に対して構成薬物を記しその使用法が述べられている。適応疾患としては、血止・打撲・淋病・消渴・疝気をはじめ、およそ70種にのぼる。また刺絡・灸法の記述も若干みられる。その他には「山部村関左内伝」「瓜生法橋宜安伝」「諏方竹内新八門人神戸周平伝」などの家伝の妙薬や、玄玄斎道人著『外科手引草』からの引用による妙薬も収録されている。

『妙薬集』と『薬真途異語』『施本大和医語』『刺絡聞見録』の関連性

書誌の冒頭で述べたように本書に該当すると考えられる『薬真途異語』『施本大和医語』『刺絡聞見録』の記述を以下に示す。

はじめに『薬真途異語』『施本大和医語』には「…爰ニ於テ考フルニ元ヨリカク辺鄙ニハ医モナク薬モナキ事成レハ上古ノ神方伝リ有ルベシト。夫ヨリ山中エ入ヒトツノ小村アレバ足ヲ止メテ其所ノ奇方妙薬ヲ探リ既ニ五十余品ヲ得タリ。別書ニ記ス」(11丁裏9～12丁表3)とある。『薬真途異語』『施本大和医語』の成立した1811年にはわずか「五十余品」とするのに対し、6年後に著された『妙薬集』では約370種の療法を収録していることは、この期間でかなり積極的に民間療法を修得したことになる。これは刺絡だけでは足りない疾病が多かったことを示唆するものであろう。

一方、『刺絡聞見録』には「…我ガ投ズル湯薬ハ貧民ヲ救フ主トス。故、遠ク異域ニ求ルニ心ナク我国ニ生ジテ求ヤスク價貴ヲ嫌、卑ヲ主トシテ服シヤスカランコトヲ期ス。諺云、人参吞デ首縊ルト云ノ薬ヲ与コトヲ欲セズ、我邦ニ生ズルノ薬品ヲ以テ万病ヲ治スルノ工夫ヲナス。其コレヲナスト云モノハ他ニナサザル刺絡ニテ疾病ノ八九ヲ去リ其一二ヲ治スルノ故ナリト。故、経験ノ奇方ノ如キハ実ニ他ニ比スベキナシ。コレハ別ニ一書トナシテ他日刊行セントス」(巻上23丁表5～13)とある。要するに、民間薬を使う目的は貧民を救うためであり、疾病の

8～9割を刺絡で治するため、高価な漢方薬は必要なく民間薬で十分に効果があげられるというのである。大助は『刺絡聞見録』を著すうえで、東朔が民間療法を重視していたことにはあえて触れていない感があるなか、唯一それを記す条文である。また本条文は東朔の真意であり、書かざるを得なかったのであろう。

ところで『薬真途異語』『施本大和医語』に「…本外二科者、言ニ及バズ、婦人、小児、打撲、接骨、一切体中ニ有所ノ諸病、就中、眼病ハ刺絡ナラデ即効少ナシ…」(10丁裏3～5)とあり、すべての疾患に対し刺絡は有効な療法であるが、とりわけ眼疾には不可欠であるとする。これについて『妙薬集』の37丁表から41丁裏にかけて「眼疾薬療ノ功能」として、「諏方竹内新八門人神戸周平伝」を引用し40種の薬と主治が記されている。東朔は眼病に関してはかなり薬物を併用していたことが推される。また、『刺絡聞見録』で東朔が刺絡の師として崇めている天橋将監の伝として「アサヌキノ妙薬 天橋将監伝」(15丁表)、『薬真途異語』『施本大和医語』にも同様の記述がみられる「アカエイニ刺レタル妙方 婦人ノ陰門ノ毛ヲ取テ其痛口ニ付ルナリ…」(6丁裏)が収録されていることから、本書と『刺絡聞見録』『薬真途異語』『施本大和医語』の関連性が示唆される。

以上、本書の出現により『薬真途異語』『施本大和医語』『刺絡聞見録』に「奇方・妙薬が収録された本を他日刊行する」と記された書に該当する著書の実在が確認された。また、『薬真途異語』『施本大和医語』では民間療法の重要性を述べているが、その実態もより明らかになった。一方、『刺絡聞見録』では民間療法についての記述は少なく、薬物治療に関しては上述のほか「湯薬ヲバ主トセズ、又主トセザルト云タリトテ、コレヲ捨ルニハアラズ」(巻下8丁裏9～10)とあるに過ぎない。刺絡治療においても薬の併用は数例のみである。ところが、本書により東朔は民間薬も重視し併用する頻度もかなり多かったことが推される。よって刺絡を主体とするものの、これまでに描かれた刺絡一辺倒の治療家とは相違する新たな東朔像がみられる結果となった。ただ、大助は『刺絡聞見録』に民間療法の重要性を、意図して(一流の医家という人物像をつくりあげるため)記さなかった感もあり、本書の刊行には踏み

切らなかったのではなかろうか。今現在、その刊本は確認されていない。いずれにしても『妙薬集』ならびに『薬真途異語』『施本大和医語』の出現により、東朔の人間像および具体的な治療法がかなり鮮明になったといえよう。

5. 東朔を収録する伝記資料

東朔を収録する伝記資料を調査した結果¹⁷⁾、以下の資料が見い出された。順次示しながら考察を加えていくことにする。

三輪東朔の肖像画賛と解説¹⁸⁾ (図6)

東朔の出自を知る上で最上の資料である。はじめに肖像画賛について述べる。軸の上部には「不生不滅心 風(ふ)と出て、風くに風と誘引(さそ)われ、風と生まれて、風と妖(まどわ)され」と、道歌(仏教や心学の精神を読み込んだ教訓の和歌)とも、辞世の句ともとれる和歌がある。左上には「文政二己卯初秋」と、本軸が1819年の初秋に制作されたことを記す。その下に「万病瀉血中興」とあることから、『内経』以降、日中伝統医学の歴史において衰退の一途をたどった瀉血療法を東朔自らが中興の祖となり、本療法の普及に尽力したことを示す。その下には「皇都産 三輪東朔 大神匡明^⑨」とあり、京都の人で、大神匡明とも称していたことが知られる。軸の右端中央には「行年七十三翁」とあり、本軸が制作された文政2年(1819)の初秋に73歳であったことが判明する。よって、生年はこれより逆算すれば延享4年(1747)と確定できる。一方、没年はその横に「釈風来舎塵芥居士」と戒名を記すものの、さきの年齢において行年(行年の意は没年と解されることもあるが、単に年齢を示すものである)とすることから確定し得ない。肖像画の右横下方に「□□一器紀英章筆」と、絵師の名が記されている。英章は菊川英章、本性は浅野氏、文政年間の浮世絵師である¹⁹⁾。

次に肖像画賛に付された藤浪の解説を示す。「名ハ東朔、字ハ望郷、浅草庵ト号ス。山城ノ人、医ヲ志シ、諸邦ヲ遊歴ス。北総銚子ニ足ヲ停メ、廃人ヲ治セリ。後、江戸ニ移リ門戸ヲ張り、業、大ニ行ル」。ここまでの解説は後述する『日本医譜』『続諸家人物志』『古今墨蹟鑑定便覧』などと肖像画賛および『刺絡聞見録』をもとに記されたものであろう。ただ字の「望郷」は上記の人名録3書とも「望卿」としていることから誤りであろう。「諸邦を遊歴す」

図6 三輪東朔の肖像画賛(藤波剛一『医家先哲肖像集』所収)

とあるのは『刺絡聞見録』にはみられず『薬真途異語』『施本大和医語』にあることから、藤浪はこの両書もみていた可能性がある。「廃人を治せり」の廃人は『刺絡聞見録』中に記される天橋将監のことであろう。

続いて解説には「嫡男、大神能明(よしあきら)ガ文政二年(肖像画の成立年)ニ図像ニ書シタル所ニヨレバ、大神医(医は匡の誤り)明ハ大和国(奈良県全域)、三輪大明神(奈良県桜井市。奈良盆地南東部、大神神社の鳥居前。別称は大三輪)の社務、高宮主水ノ一族、山城国宇治郡南山科(京都市南部、東山区の近郊地区)観修寺(かじゅうじ)住人ニテ、観修寺宮観宝法親王ニ仕奉シタル植田佐渡法橋ノ嫡男三輪弾ト云フ人ナリ。齡八十ヲ越ユ、著ス所ニ刺絡聞見録アリ」(括弧内は筆者の加筆)とある。本解説によれば、肖像画賛には東朔の長男で、三輪能明の書が付されているという。その内容を要約すると、東朔は山城の人で父は高宮主水(主水「もんど」は主水司「もりとのつかさ」の略で、令制で宮内省に属し、飲料水や氷のことをつかさどる役人)の一族、植田佐渡という。東朔はその長男で三輪弾と称し、年齢は80歳を越え、『刺絡聞見録』を著したと

図9 『日本医譜』
1830頃成立

の肖像画賛)ではなく「文政初年」としている点。一つは享年を「六十余」としている点である。没年および享年に関しては確定し得ないが、東朔の肖像画賛によれば文政2年に73歳であったことは明らかである。またその解説では80歳を越えるともある。一方『刺絡聞見録』にも「七旬ヲ踰エ」との記述があることから「著所ニ刺絡聞見録有リ」と記すが、編纂するうえで『刺絡聞見録』を参照していなかったことが知られる。

本書は『刺絡聞見録』刊行のわずか10数年後に編纂されたものであるが、東朔に関する記述はきわめて曖昧である。これに関しては次の2つのことがいえよう。一つは『刺絡聞見録』が、京都・大阪・江戸で出版されたものの出版部数が僅少で入手困難であったこと。一つは東朔の生存が確認できる1819年以降、10年をまたずに三輪一門はすでに断絶していたことなどが考えられる。いずれにしても本書は文献資料としての価値は高いが、こと東朔に関する記述は誤りが多く本書初出の「字ハ望卿、号ハ浅草庵」も立証する資料はなく、信憑性はかなり低いものと考えられる。

『続諸家人物志』1832刊²⁴⁾

本書には著名な儒家や医家の伝が収録されている。「医家の部」には計19名が著録され巻下25丁裏に「三輪東朔 名ハ東朔、字ハ望卿、浅草庵ト号ス、常陸ノ人、台州ニ学テ江戸ニ住シ刺絡ノ説ヲ唱ヘ大ニ行

ル、文政ノ初、六十余ニシテ没ス、刺絡聞見録ヲ著ス」とある。

『古今墨蹟鑑定便覧』1855刊²⁵⁾

本資料も『続諸家人物志』と同様の書で、その「医家の部」には137名が収録され、巻下86丁表に「三輪東朔 名ハ東朔、字ハ望卿、浅草庵ト号ス 常陸ノ人、江戸ニ住ス、刺絡ノ術ヲ台州ニ受ケテ大ニ行ハル、文政ノ初年歿ス年六十」とある。

ところで、本資料と前述の『日本医譜』『続諸家人物志』は、ほぼ同様の内容である。これは刊行年代の早いものの内容(『日本医譜』か)を後者が踏襲していったものと考えられる。よって3書とも東朔は常陸の人としている。一方、没年および享年に関して『日本医譜』では「文政初年歿す。年六十余」と没年を限定するが享年は特定していない。『続諸家人物志』では「文政の初め六十余にして歿す」と没年、享年ともに限定していない。ところが本書(3書中で刊行年が一番遅いと考えられる)では「文政の初年歿す。年六十」と没年、享年ともに限定している。いずれにしても、東朔が70歳を越えていたことは事実であり本資料および『日本医譜』『続諸家人物志』の記述内容は信頼性に欠ける。しかしながら従来の諸文献²⁶⁾では本資料の説により、東朔は常陸の人で没年は文政元年(1818)とし、生年は享年より逆算して宝暦9年(1759)とするものが多い。

『三輪叢書』1929刊²⁷⁾

本書には三輪家の系譜の詳細が記されている。そこには「三輪高宮家系」²⁸⁾と「高宮氏中興系図」²⁹⁾などが著録されており三輪姓から高宮姓への系譜上の変遷が示されている。ただ藤浪の解説にある植田佐渡の名はみられないが、主水を称するものには輪房・範房・富房・延房の4名が存する。中でも延房の祖母が山城賀茂神社の人とあることは注目しておきたい。また延房の孫にあたる千代丸が享保年間(1716～1735)の人であることから、年代的にも東朔の祖先がこの辺りに由来する可能性も考えられよう。

佐藤方定『奇魂』1831刊

佐藤方定(のりさだ)は東朔の医術を知る上で極めて重要な人物である。方定は奥州信夫郡(福島県福島市)の人で、別称には東貞(とうてい)・本樹(もとき)・大鳥舎(おおとりのか)などがある。国学の四大人の一人、本居宣長の長男、春庭の門より出て、江戸にて医を業とし、和方家を以て聞え、

水戸侯に仕えた。天保2年(1831)『奇魂(くしみたま)』(一名『尚古医典』)を刊行する³⁰⁾。

『奇魂』の巻2, 27丁表10~32丁裏8には「刺法(さすわざ)」と項目を立てて針に関する記載があるなか、刺絡についても詳細が述べられているので抜粋して以下に示す。

「…其血を物せしは、医疾令(按摩段判)針を以て折傷之瘀血を判決す、是判と為す也と有て是は折傷の瘀血を取る由なれど、他病にも物せし事、中古の書にも次々に見えたるにて知べし、近古には浪華の入江大元と云う人、万病刺すに宜しき由、刺血絡正誤と云うに論ひ、都に在りて、垣本針源と云いし人、此の術にて諸病を治し由、熙載録という書に詳しき也、近くは荻野氏、刺絡篇、と云うを作りたり、さるを紅毛法の流行しより、皇国に初めたり抔思ふ人もあめるは過ち也、[されど猶、右の人等も、上世より有し事は知らざめり、中にも荻野氏は、紅毛の説と内経の法とを以て撰ばれて、文は高く聞こゆれども、術は拙かりけん、総て右の書等は言痛き説多くて迂遠し、其の中に治腫方、刺血絡正誤、熙載録は、文拙けれど漢紅毛に依らず、術は精しく平常実事によく用けらし、されど三輪匡明(まさあきら)

大人(ウシ:江戸時代、国学者の間で師匠・学者の敬称をあらわす)の、漢紅毛の理論を棄(注:『杏林叢書』³¹⁾に収録される『奇魂』には「棄(すて)」を「弁(わきまえ)」と誤り、相反する意味になってしまう)て、万病唯瘀血より成ると云いて、悪血を瀉すを主とし、薬を佐としつつ、且つ蕃薬(民間薬)を物せて、彼の国法を学ぶ医の、古来難治とせし病を直されて、人を驚かされたる事多きには如ず、我此の術は此の大人に学びたり]…。[]内は本書中双行細字で記されている。()内は筆者の補筆である。

上記によれば当時、刺絡を以て知られる医家に入江大元『刺血絡正誤』、垣本針源『熙載録』などがあり文章は拙いが術は優れていた。一方、刺絡を普及したのは荻野元凱かのように言われているが、それは誤りで中古より綿々と行なわれていた。元凱の文章は優れているが術は拙いなどとある。本書で注目すべきは三輪匡明に関する記述である。匡明が東朔の別称であることは『薬真途異語』『施本大和医語』、東朔の肖像画賛で確認できる。また「匡明」に「まさあきら」とルビがふられていることで読み

方も確定できる。ここに記されている条文は東朔の医術をきわめて正確に著しており、さらに方定は東朔を大人と呼び実際に刺絡を学んでいることから、両者の結びつきは非常に強いものといえよう。

ところで東朔について記した条文は『今世医家人名録』の「瀉血 浅草北馬道 三輪東貞 家ニ瀉血伝法有り、和漢紅毛諸家ノ法ニ抛ラズ、自ラ一家ヲ為ス、諸病衆医難ズル所必ズ善ク之ヲ治スト云ウ、マタ奇術也(原漢文)」と共通するところがある。さらに『江戸近世医家人名録』初編(1819)では「三輪東朔」とあるのに対し翌年刊行された『今世医家人名録』では「三輪東貞」とする。この東貞という名称が東朔の別称であることは既存の資料では確認できない。ところが方定は「東貞」とも名乗り東朔から直伝を受けたといい、さらに両者とも和方を信奉し江戸で開業していたことが知られる。

以上のことから推測の域は出ないが、東朔の一門を方定が継いだ可能性は十分に考えられる。『今世医家人名録』に「家ニ瀉血伝法有り」とある条文は、東朔より直伝を受けたことや譲り受けた『薬真途異語』『施本大和医語』『刺絡聞見録』『妙薬集』などの書を指す可能性もあろう。また『施本大和医語』の序文は『薬真途異語』の序文に比べてかなりしっかりとした文章に改められていることから方定の手になる可能性もある。これより『施本大和医語』の序文末にみられる「三輪試」は方定とすることもできよう。さらに空想を膨らませれば三輪試の「試」は文字通り試しに方定が三輪一門を引き継いだとも解されよう。すべて実証することはできないが、一応の仮説を立てておくことも全く無意味なことではなかろう。

6. 新たな三輪東朔伝

出生地と名称について

東朔は京都、山城の人。名称には三輪弾、三輪匡明、大神匡明、三輪愿、三輪試、三輪東貞、学古、浅草庵、望卿、望郷などがある。このうち浅草庵、望卿、望郷は信憑性が低く、試と東貞は東朔自身か、嫡男の能明か佐藤方定の可能性が考えられる。

生没年について

生年は1747年と確定できる。没年と享年に関しては二つ考えられる。一つは1819年で73歳。一つは文政11年(1828)以降、享年は80数歳となる。ただ、1819年以降は存命していたとしても治療家としては一線

を退き、隠棲していたことが推される。

家系について

父は上田佐渡（高宮主水の一族で、大和の国の三輪神社に務め、山城の国、宇治郡南山科勧修寺に住み、勧修寺宮観宝法親王に仕えていた）。東朔はその嫡男で子には嫡男の大神能明がいる。

足跡について

東朔は30歳のころより刺絡治療を専門とし、臨床経験40年を有す。初めは北総銚子にて業を行う。そこで天橋将監の難病を療したことで東朔流刺絡を開眼する。1800年頃、東朔53歳前後のときに江戸浅草北馬道に移り開業する。刺絡以外に民間薬や民間療法を重視し、北総銚子浦・信州善光寺の辺りの丹波嶋・常州の山中などを遍歴するなか、修得した療法を『妙薬集』と題して整理したが出版には至らなかったようである。民間療法のなかでも特に灌水法には強い興味を示し、長期にわたり常州の山中に滞在した。自身の流派を「好古大和流」と名付けて一門を成していた。しかし1819年以降は嫡男の能明か佐藤方定が後を継いだ可能性はあるものの、10年を待たずして断絶したものと考えられる。門人には大助、方定のほかに田中安忠、手塚良仙などがいた。

伊藤大助の功績

東朔の医術を伝えた最大の功労者である大助について記しておこう。大助（1778～1838）は通称で、名は初め祐慶（すけよし）のち祐義（すけよし）、字は忠岱（ちゅうたい）、号は鹿里（ろくり）・潜龍斎・仰継堂。信濃の人で、儒を大田錦城に、古方を吉益南涯に、刺絡を三輪東朔に学んだ³²⁾。

『刺絡聞見録』の大助自序によると、湯液治療だけでは治し難い疾病に対しては刺絡が有効であると考え、山脇東門、中神琴溪、吉田長俣等に学ぼうと考えていたところ、銚子にて東朔の話を聞き江戸で開業していることを知り1817年、大助40歳のときに入門することとなる。大助は東朔という人間、またそのするところの刺絡の術と理論に心酔し、東朔流刺絡を世に広めるために『刺絡聞見録』を著したという。入門してわずか半年のうちに出版にこぎついている。また同時期に『妙薬集』も筆写し終えていることから、その熱意が十分に感じられる。大助は『刺絡聞見録』を刊行するにあたって師である大儒の錦城に序文を請い、その序文を一流の揮毫家、董斎と、版木師の沖鶴年に行わせていることから、か

なりの私費を投じたものと考えられる。そして著名な錦城と大助の序文が付されたことで『刺絡聞見録』は世に知られ、後に種々の人名録にも録され今に伝わることができたのであろう。一方、『葉真途異語』『施本大和医語』は元来、弟子や患者に配る目的で刊行されたものと考えられるため、一般には流布しなかったものと思われる。

ところで『刺絡聞見録』には東朔が和方を信奉していたこと、中神琴溪を高く評価していたこと、佐藤方定や『葉真途異語』『施本大和医語』に関する一切記されていない。民間療法についてもほとんどふれず、刺絡治療例において薬物治療との併用はごくわずかに記されているに過ぎない。これらのことは東朔が刺絡を専門とする一流の医家であるという人間像を作り上げるため、大助が意図的に行ったことかも知れない。そのため民間療法を収録した『妙薬集』は刊行されなかったのではなかろうか。

大田錦城と刺絡の背景

上記のごとく錦城が序文を著したことで『刺絡聞見録』は命脈を保てたといっても過言ではなかろう。序文の前半では、我が国において刺絡再興の契機となったのは錦城と同郷の荻野元凱が著した『刺絡編』の刊行であり、刺絡で知られる著名な医家には縣道策（あがたどうさく）、中神右内（なかがみうない）などがいるものの両者は刺絡の専門家ではないとある。東朔については「其れ此の術を専らにして屢（しばしば）神効を奏する者は三輪東朔に若は莫し（原漢文）」と記し、東朔は刺絡を専門としその術においては比肩しうる医家はいないと、絶賛している。

錦城は刺絡を大河の洪水にたとえて、堤防の一部を切り開き放水することで防ぐ方法が瀉法（瀉剤もしくは刺絡）であり、堤防を高くして防ぐ方法が補法（補剤）であるという。これについて私見を述べると、洪水の例はこと刺絡に関しては明らかに的外れである。刺絡の的とする血管は流れの悪い静脈であり、洪水の例は流れのよい動脈に相当しよう。特に東朔の刺絡は他者のそれとは異なり静脈よりさらに流れの悪い末梢血管を的とする。また一般の刺絡は東西を問わず、鬱血自体を採るとか血液量を減らすことを目的とすることから採血量も多く瀉法的な要素も含まれよう。しかし東朔は鬱血自体ではなく、

鬱血の原因となる毒血を排除することにより血液循環障害の改善を目的とすることから、そこに補瀉の概念が入り込む余地はない。以上のことより中国伝統医学では、血液循環に関する認識は非常に希薄であったものといえよう。よって刺絡を中国伝統医学理論で行うことは、刺絡本来の有効性をかえって減少させてしまうものと考ええる。東朔の刺絡は佐藤方定の言に「漢紅毛の理論を棄て」とあるごとく独自の理論を打ち立てている。それは江戸期にありながら非常に現代医学的な観点から刺絡をとらえている。

序文後半では治療の補瀉は車の両輪のごとくどちらも重要であると説きながらも、補法こそが主体をなすべきことを主張している。それにも関わらず、瀉法（瀉剤）が隆盛を極めていることは嘆かわしいことであり、なかでも刺絡は瀉法の最たるものだという。これより当時は古方派の勢力が非常に強かったことが窺われ、また刺絡に対してもあまり好意的ではなかったことがわかる。東朔はこれに関して、自分の刺絡術を少しも理解していない錦城に対して、さぞかし落胆したことであろう。しかし錦城の序文があることで、より多くの人の目に留まればよいとも考えたのか、あるいは大助にすべてを一任したのであろうか。

ところで「西洋流刺絡」に対して「内経流刺絡」という言葉が用いられるが、『素問』における刺絡の位置づけは補瀉以前に行うべき療法とされているようである。すなわち刺絡をする上で虚実や補瀉の概念を持ち込むことは「内経流」に反しているといえよう。しかし上記より一般医家の認識としては、刺絡イコール瀉法と捉えられていたことがわかる（現代でもその傾向は強い）。これは、あえていえば「内経流」ではなく「後世派流」と呼ぶべきであろう。

東朔と荻野元凱

『刺絡聞見録』に「抑（そもそも）我、主張スル所ノ刺絡ノ術、初、荻台州（荻野元凱）先生ニ学…」とあるが、本書ならびに『薬真途異語』『施本大和医語』『妙薬集』のいずれの書にも元凱の刺絡に関する記述は一切みられない。また、『奇魂』によれば「中にも荻野氏は、紅毛の説と内経の法とを以て撰ばれて、文は高く聞こゆれども、術は拙かりけん」とあることから、こと刺絡の術においては得るものは殆どなかったものと考えられる。ただ、東朔は刺

絡の際に吸角を常用し、ときには縛緊法（布等で縛り静脈を浮き上がらせる方法）も行う。元凱著『刺絡編』（1771刊）には「角法」に関する記述や「縛緊の図」が収録されていることから参考にした可能性は考えられよう。いずれにしても一般医家からは非常に誹謗中傷された刺絡に対し、医家としても儒者としても著名な元凱によって『刺絡編』が著されたことは誠に意味のあることであり、東朔はその門を訪れ実見したかったに違いない。ちなみに「刺絡」という名称は日本独自の呼称であるが、『刺絡編』以降、一般的に用いられるようになった³³⁾。

7. 総括

東朔の医術は、これまで刺絡ばかりがクローズアップされてきたが、『薬真途異語』『施本大和医語』『妙薬集』の出現により、薬物を主体とする民間療法も重視していたことが明らかとなった。また、『刺絡聞見録』では「刺絡こそは天下第一義の術たり」として疾病治療を主体とするのに対し、『薬真途異語』『施本大和医語』では「無病の人には薬は益なし」と、予防法としての刺絡に重点がおかれている。すなわち東朔の医術は、予防には刺絡を第一とし、疾病治療に対しては刺絡を優先するなか民間薬を併用し、さらに灌水法などの民間療法も積極的に用いたとすることができよう。

『刺絡聞見録』では刺絡を主体とすべき治療法であると主張する理由は、薬物治療より勝っているからとの表現が多い。しかし民間薬を重視する理由は貧民を救うことにあり、実際にはかなり併用していたことが明らかとなった。これより刺絡を主体とするもう一つの理由は、漢方薬は高額であり庶民にとっては負担がかなり重かった医療状況において、軽症の疾病には漢方薬は必要とせず、刺絡のみで事足りる。また薬を必要とする重症な疾病も刺絡を併用すれば、安価な民間薬で十分に効果を出せるということを経験したかっただけであろう。しかしながら、当時は刺絡に対して湯液家からの誹謗中傷がきわめて強く、患者からも嫌厭されていたという背景が窺われる。

東朔の医術の特徴は、生命維持活動の根本をなす血液循環に主眼をおいたこと、歴史上行われていた刺絡は静脈を的とするのに対し、微小循環（毛細血管）を的としたこと、一般の治療が症状の緩和を目的とするのに対し、生体の恒常性の維持回復を目的

としたこと、病気の根本原因と治療法と治療部位を明確に示したことが挙げられる。『刺絡聞見録』では天橋将監を異人と崇め刺絡の師としているが、明確には東朔に師はなく、自らの手で一般の刺絡とは方も論も異なる独自の東朔流刺絡を確立したものである。その医術は薬物に依存する現代医療の弱点を十二分にカバーできる、きわめて安全かつ有効な治療法であり、現在、掲げる予防医療の重視と医療費の削減という指針に対しても、大きく貢献できるものと考えられる。

謝辞 本稿執筆にあたり、ご多忙の中、小曾戸洋先生と星野卓之先生には多岐にわたり多くの御指導と御教示をいただきました。また周防一平氏にもいろいろと御助力をいただきました。この場をお借りして、心より感謝し御礼を申し上げる次第です。

利益相反 (COI) に関して開示すべきものなし。

文献

- 1) 三輪東朔口述, 伊藤大助筆記. 刺絡聞見録. 逍遙堂, 江戸 1817.
- 2) 三輪東朔口述, 伊藤大助筆記. 刺絡聞見録. 自然社, 東京 1985. 「刺絡聞見録」解題1-7.
- 3) 友部和弘, 小曾戸洋. 三輪東朔の伝記考. 全日本鍼灸学会雑誌 2000; 50: 167-173.
- 4) 三輪愿. 葉真途異語. 文化8年(1811)序刊, 大塚敬節旧蔵, 武田科学振興財団杏雨書屋所蔵. (本書は外題が欠損しており内題を書名とした).
- 5) 藤浪剛一. 医家先哲肖像集. 刀江書院, 東京 1936. 202-203.
- 6) 友部和弘. 中神琴溪の刺絡. 日本医史学雑誌 2000; 46: 386-387.
- 7) 友部和弘, 石野尚吾. 中神琴溪と郭志遠の刺絡. 日東医誌 2002; 53(6): 187.
- 8) 友部和弘. 中神琴溪の刺絡. 温知会会報 2000; 46, 冬期号: 20-35.
- 9) 三輪試. 施本大和医語. 文化8年(1811)序刊, 武田科学振興財団杏雨書屋所蔵. (本書は文献4)の異本であり内題は同様である。そこで本書と文献4)を区別するために本書は外題を, 文献4)は内題を書名として用いた).
- 10) 武井周朔, 稲葉潤堂. 江戸近世医家人名録, 初編. 両塾蔵版, 文政2年(1819)序刊; 「美」部, 第36丁表7.
- 11) 白土雙儀. 近世医家人名録. 龍峯蔵版, 文政3年(1820)校正; 「北」部, 第26丁表2-3.
- 12) 江戸現在広益諸家人名録, 2編. 金花堂蔵版, 江戸天保13年版; 「イ」の部, 第1丁ウラ4. (森銃三, 中嶋理寿. 近世医家人名録集成. 勉誠社, 東京 1976; 2: 65).
- 13) 井上宗雄, 岡雅彦, 尾崎康, 他. 日本古典籍書誌学辞典. 岩波書店, 東京 1999. 83.
- 14) 友部和弘, 小曾戸洋. 三輪東朔の伝記考. 全日本鍼灸学会雑誌 2000; 50: 168-169.
- 15) 友部和弘. 刺絡専門医家・三輪東朔と工藤訓正. 鍼灸 OSAKA 2015; 31: 113.
- 16) 三輪東朔筆, 伊藤大助写. 三輪氏家蔵方妙薬集. 文化14年(1817)写, 伊藤祐俊所蔵(大助の玄孫, 長野県北佐久郡望月町在住).
- 17) 友部和弘, 小曾戸洋. 三輪東朔の伝記考. 全日本鍼灸学会雑誌 2000; 50: 172-173.
- 18) 藤浪剛一. 医家先哲肖像集. 刀江書院, 東京 1936. 202-203.
- 19) 沢田章. 日本書家辞典. 思文閣, 京都 1927. (「人名篇」39頁に著録される).
- 20) 友部和弘, 小曾戸洋. 三輪東朔の伝記考. 全日本鍼灸学会雑誌 2000; 50: 173.
- 21) 武井周朔, 稲葉潤堂. 江戸近世医家人名録, 初編. 両塾蔵版, 文政2年(1819)序刊; 「美」部, 第36丁表7.
- 22) 白土雙儀. 近世医家人名録. 龍峯蔵版, 文政3年(1820)校正; 「北」部, 第26丁表2-3.
- 23) 宇津木昆台. 日本医譜. 成立年不詳(1830年頃成). (江戸写本, 無窮会神習文庫蔵).
- 24) 青柳文蔵. 続諸家人物志. 須原屋茂兵衛, 江戸 天保3年(1832). (森銃三, 中嶋理寿. 近世医家人名録集成. 勉誠社, 東京 1976; 3: 176).
- 25) 川喜多真一郎. 古今墨蹟鑑定便覧. 勝村治右衛門, 京都 安政2年(1855). (森銃三, 中嶋理寿. 近世医家人名録集成. 勉誠社, 東京 1976; 4: 291).
- 26) 友部和弘, 小曾戸洋. 三輪東朔の伝記考. 全日本鍼灸学会雑誌 2000; 50: 173.
- 27) 大神神社社務所編. 三輪叢書. 大神神社社務所, 奈良 1929.
- 28) 大神神社社務所編. 三輪叢書. 大神神社社務所, 奈良 1929. 581-601.
- 29) 大神神社社務所編. 三輪叢書. 大神神社社務所, 奈良 1929. 654-655.
- 30) 市古貞次, 堤精二, 大曾根章介, 他. 国書人名事典. 岩波書店, 東京1995; 2: 136.
- 31) 田中恒. 杏林叢書. 杏林社, 東京 1925; 4輯: 115.
- 32) 町泉寿郎. 伊藤大助の伝記資料. 漢方の臨床 2002; 49: 602-604.
- 33) 友部和弘, 小曾戸洋. 「刺絡」の名称に関する考察. 日本医史学雑誌 2006; 52: 104-105.